

液化ガス貯蔵設備の容量等の公表

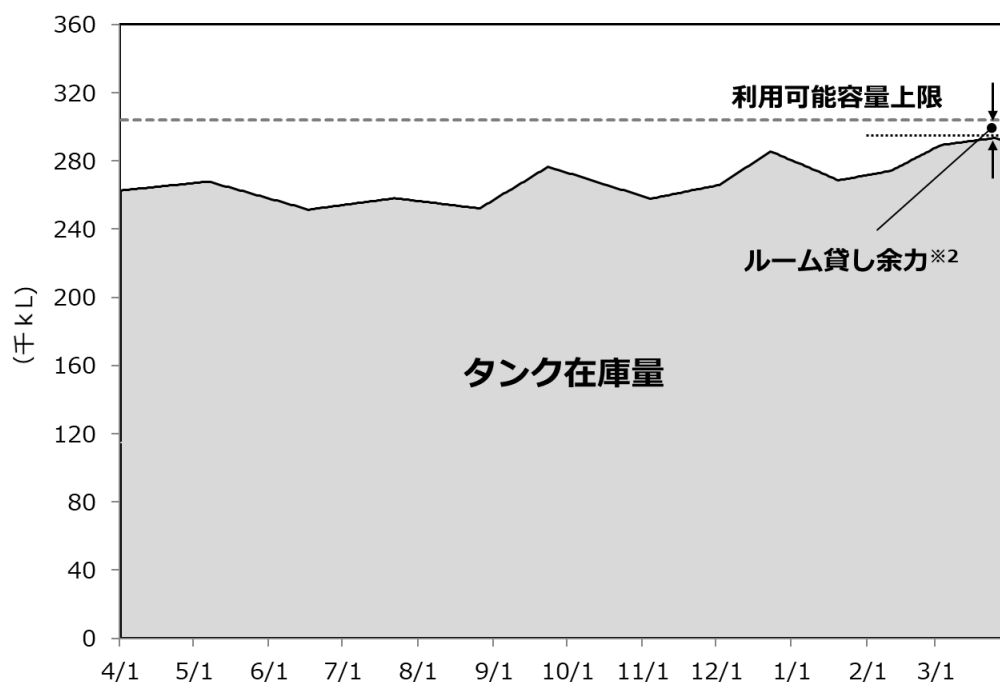
・以下は、ガス事業法 第90条第1項及び施行規則 第142条に基づき、公表するものです。

対象基地：ひびきエル・エヌ・ジー株式会社 ひびき LNG 基地

(1) LNG 貯蔵設備における LNG 貯蔵の余力の見通し

1. LNG貯蔵設備

タンク容量 360, 000 k L



※1：上図は、2020年度のLNG貯蔵余力をイメージで表したものです。なおLNG船の受入状況、都市ガスの需要動向及び受入設備の工事等により余力は変動します。

※2：2019年6月時点では、10千kLのルーム貸し余力があります。またルームシェア方式の場合、以下(※3)に示す条件において、年間280千kL(LNG船2隻)程度受入可能です。それ以外の条件であっても、ご利用可能な場合がございます。詳細についてはお問合せください。また、2022年度以降は、計画段階の新規需要により取扱量は増加し、余力は無くなる見込みです。

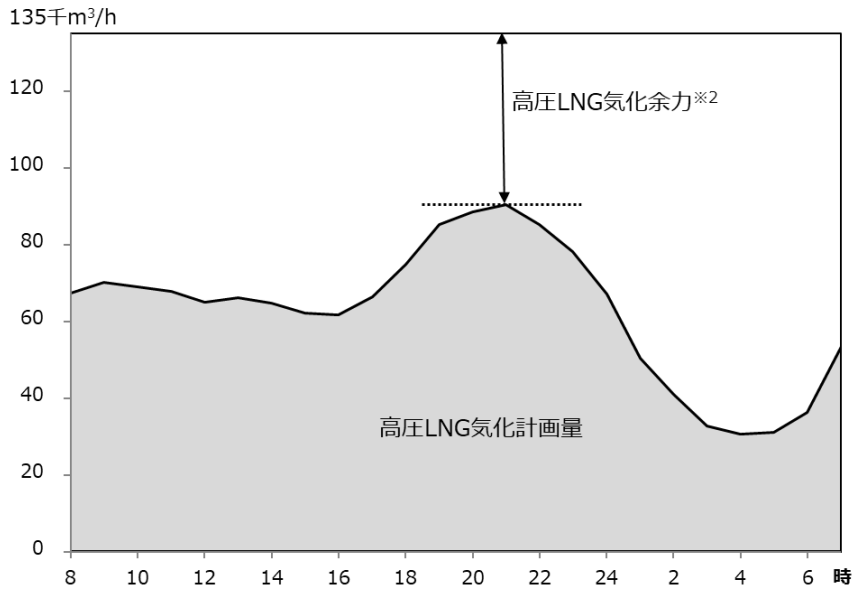
※3：ルームシェア方式における受入量は、入船1回あたり140千kL(発熱量42.5MJ/Nm³以上)を、年度終了時にLNG在庫が0となるように、6カ月間の間一定の割合で払い出した場合の結果となります。また、高在庫が見込まれる期間は、当社からLNG貸出を行い、高在庫期間後にLNGを受入れ返却した場合の結果となります。

(2) ガス発生設備におけるガスの製造の余力の見通し

1. 高圧 LNG 気化器

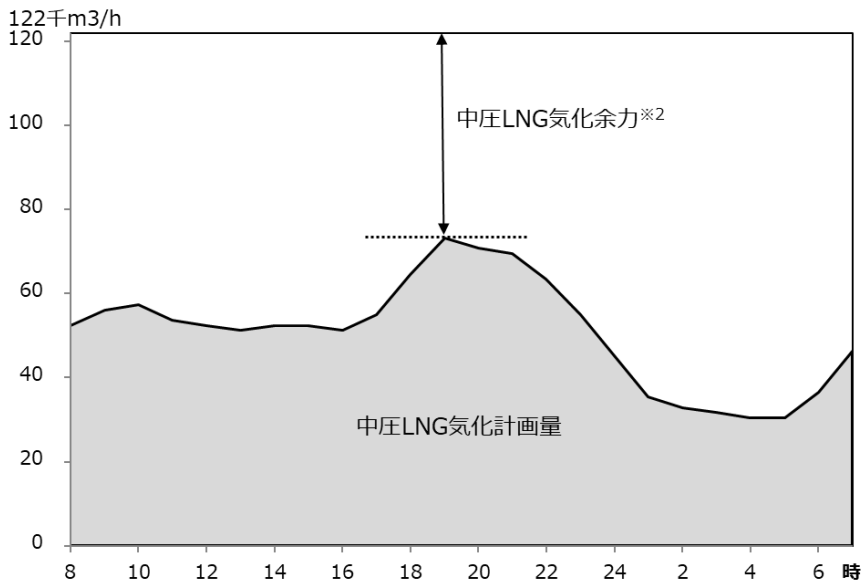
気化設備 55 t/h × 3 基 (オープンラック式)

※1 基は高中圧兼用の予備機扱いとしています。



2. 中圧 LNG 気化器

気化設備 50 t/h × 2 基 (オープンラック式)



※1：上図は、2020 年度の最もガスを生産する日（ピーク日）における LNG 気化余力（日量）をイメージで表したものです。なお、ピーク日 LNG 気化余力は、都市ガスの需要動向、予定外の設備工事等により変動します。

※2：2019 年 6 月時点では、高圧 LNG 気化器で 44 千 m³/h、中圧 LNG 気化器で 49 千 m³/h の LNG 気化余力があります。また 2022 年度以降、高圧気化器については、計画段階の新規需要により余力は無くなる見込みです。

(3) ガス受託製造の役務の提供を受けようとする者が利用できる船舶の種類及び船型並びに液化ガスの種類及び品質

1. 船舶の種類

最大船型	
メンブレン型	21.7 万 m ³ 級
モス型(従来型タンクカバー)	17.7 万 m ³ 級
モス型(連続型タンクカバー)	18.0 万 m ³ 級

- ひびき LNG 基地に入港実績がない LNG 船の入港にあたっては、「新形式 LNG 運搬船及び LNG 運搬船の大型化に係る航行安全・防災対策の安全対策評価ガイドライン」(公益財団法人 日本海難防止協会)の最新版にもとづく入港可否の検討が必要です。入港可能と判断された場合には船陸整合性確認手続きを行います。

2. 液化ガスの種類及び品質

①液化ガスの種類・・・液化天然ガス(LNG)

②品質の目安

組成	メタン	84.0 モル%以上
	ブタン以上	2.0 モル%以下
	ペンタン以上	0.1 //
	N ₂	1.0 //
発熱量	42.51~45.00 MJ/m ³ N	
その他	固形またはその他の不純物及び異物を含まないこと	

- 受入可能な LNG の性状は、個別の利用条件によって異なるため、上記の数値は目安とします。
- 発熱量については、LNG 受入後のタンク内総発熱量が、契約期間を通じて上記の範囲となる性状とします。
- ひびき LNG 基地から、当社等および他ガス事業者の LNG サテライト基地に都市ガス原料として、LNG をローリー出荷しています。よって受入可能な LNG の性状(目安)の範囲内であっても、ひびき基地の LNG 貯槽の熱量次第では、LNG サテライト基地の運営に支障をきたすおそれがあり、この場合は受入不可となります。

(4) 配船計画の策定期の見通し

翌年度分の配船計画の策定スケジュールは概ね以下の通りです。

- 本年度 7 月ごろ・・・LNG 売主との間で配船協議を開始
- 本年度 7 月～3 月ごろ・・・LNG 売主との間で年間配船計画を調整・策定

注) 上記はおおよその策定スケジュールであり、具体的な配船計画策定スケジュールは様々な LNG プロジェクトによって異なります。

以上